

ヘルムート・コールとケーテ・コルヴィッツ

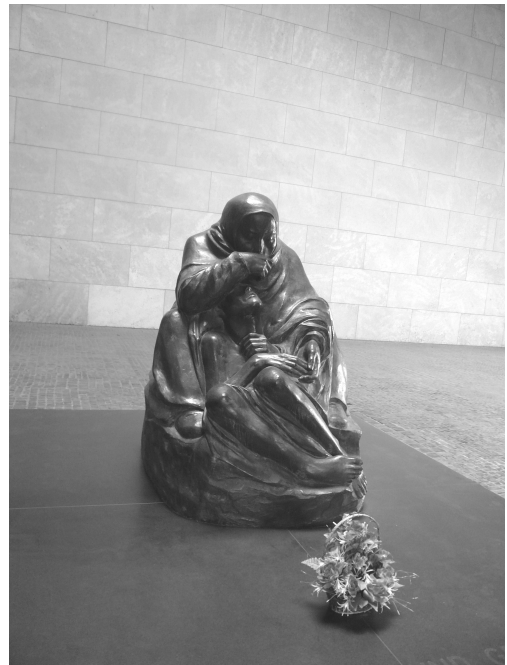
高坂 純子

1. はじめに

ベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデンの東端、ドイツ歴史博物館とフンボルト大学の間に小さな新古典主義の建物がある。プロイセン王ヴィルヘルムⅢ世の依頼を受け、建築家カール・フリードリヒ・シンケルが1816年から1818年にかけて建築した新衛兵所「ノイエ・ヴァッヘ」である。この歴史的建造物は19世紀から20世紀にかけてさまざまな時代をくぐり抜け、そのときどきに与えられた役目を果たしてきたが、現在はドイツ連邦共和国の「戦争と暴力支配の犠牲者のための国立中央追悼施設」Die Zentrale Gedenkstätte der Bundesrepublik Deutschland für die Opfer von Krieg und Gewaltherrschaftとなっている。そしてその中央にはモニュメントとしてケーテ・コルヴィッツの「死んだ息子を抱く母親」像（拡大レプリカ）が置かれている。この国立中央追悼施設を大きな反発を受けながらも完成させたのが、当時の首相ヘルムート・コールだった。本稿では新「ノイエ・ヴァッヘ」建設を通して見えてくる、政治家コールと芸術家コルヴィッツのつながりを掘り起こしたい。

2. 「ノイエ・ヴァッヘ」の歴史

ベルリンの「ノイエ・ヴァッヘ」はもともとプロイセン王宮の衛兵所として軍事的役割を担っていた建物だったが、興味深いことに、ドイツ帝国の崩壊でその役目を終えた後はつねに人が死者と向き合うための場所となってきた。ワイマル共和国の時代には別の利用法¹も考えられたが、公募²で1931年に「世界大戦戦没者の追悼施設」Gedächtnisstätte für die Gefallenen des Weltkriegesとして改築された。このとき建築家ハインリヒ・テッセノの設計にもとづく新しい「ノイエ・ヴァッヘ」が誕生、もとあった窓と間仕切



りが取り払われ、建物全体がひとつの追悼空間となった。また天井中央には円形の開口部が設けられた。これが現在の「ノイエ・ヴァッヘ」に引き継がれている空間である。さらにテッセノは天窓の下に黒い花崗岩のモノリスを据え、その上に金属製の「樅の葉の冠」を置いてモニュメントとした。テッセノの「ノイエ・ヴァッヘ」は、続くナチ時代にも大きな変更は加えられず、追悼の場として引き継がれた³。ただしナチ時代は常時歩哨兵の立つ「世界大戦戦没者の顕彰記念碑」Ehrenmal für die Gefallenen des Weltkriegesと位置づけられたため、軍事的色彩の濃い建物となった。その後第二次世界大戦末期に爆撃の被害を受けた「ノイエ・ヴァッヘ」は、1949年の東西ドイツ分裂とともに東ベルリンに位置することになる。仮の補修工事後に建物の利用法が議論されて⁴、1957年、爆撃で変形した黒いモノリスを残したまま「ファシズムと軍国主義の犠牲者のための警告記念碑」Mahnmal für die Opfer des Faschismus und

Militarismus となった。さらに 1969 年のドイツ民主共和国建国 20 周年にあたり、ガラスの角柱と永遠の炎を中央に据えた新しい追悼空間がつけられた。このように東ドイツ時代にもその追悼施設としての機能が失われなかったことは宿命的だと言いたい。そして東西ドイツ統一から 3 年後の 1993 年、「ノイエ・ヴァッヘ」は現在の姿となる。

3. コールの政治的決断

1990 年にドイツ再統一を成し遂げた第 6 代連邦首相コールは、過去の歴史を前にしたとき、統一ドイツには新しい「国立中央追悼施設」をもつ義務があると考え、その場所として過去に似通った機能を有してきたベルリンの「ノイエ・ヴァッヘ」を改築することと、そこにコルヴィッツの「死んだ息子を抱く母親」像を拡大して置くことを提案した。新しい「ノイエ・ヴァッヘ」は 1993 年 11 月 14 日の「国民哀悼の日」に落成式を迎えた⁵が、このときコールは次のような声明を発表している。「これからベルリンのノイエ・ヴァッヘは戦争と暴力支配の犠牲者を思い起こし、偲ぶ場所となる。ドイツ連邦共和国の中央追悼施設となったノイエ・ヴァッヘは、統一ドイツの重要なシンボルであり、基本法で言う、人間の尊厳と価値と権利に規定された自由で民主的な基本秩序の重要なシンボルでもある。ドイツ連邦政府は、この国立追悼施設のためにケーテ・コルヴィッツの『死んだ息子を抱く母親』像を選択した。上に述べた基本理念をたゆむことなく守るべき国家と、この偉大な女性芸術家の仕事と作品が、切っても切れない関係にあるからである。」⁶この文言からは、コール元首相の固い決意と信念を読み取ることができるだろう。

しかしながら 1993 年 1 月 27 日に発表された新国立中央追悼施設建設の政府決定は、大きな波紋を起こすことになる。そのおもな理由は次の三点である。まず議会での審議がなされていなかったこと、新プロジェクトであるにもかかわらず諮問委員会もコンペも開かれなかったこと、そして 1993 年 11 月 14 日の「国民哀悼の日」に竣工予

定という性急なタイムテーブルがすでに組まれていたことである。コールはこの件について、当時病床にあった第 4 代連邦首相ヴィリー・ブラントにも相談をもちかけているので、それは熟慮の上の責任ある政治的決断だったはずだが、強引な手続きの進め方が大きな反感を買った。

1993 年 2 月 8 日、芸術アカデミー会長ヴァルター・イェンスから連邦首相ヘルムート・コール宛てに次のような公開質問状が届けられる。「芸術アカデミーは、国民哀悼の日に戦争と暴力支配の犠牲者のための中央追悼施設をウンター・デン・リンデンにあるシンケルのノイエ・ヴァッヘに設ける、という首相のご提案と内閣決定を耳にいたしました。1931 年に公募を経てつくられたハインリヒ・テッセノ設計の内部空間が再建されるのは、嬉しいお話です。…しかし、その中にケーテ・コルヴィッツの小さな母親像をハラルド・ハーケが拡大してモニュメントにするとのことですが、これについては異議を申し上げなければなりません。…」⁷このイェンスの手紙を皮切りに、政府決定に対して賛否両論さまざまな意見が新聞や雑誌に寄せられた。これがいわゆる「ノイエ・ヴァッヘ論争」である。1993 年 3 月 24 日には「追悼の難しさ」と題して「ノイエ・ヴァッヘ」の未来を考えるシンポジウムも開催され、コルヴィッツの孫であるアルネ・コルヴィッツがギャラリーとして参加し、意見を述べている。1993 年 5 月 14 日にはドイツ連邦議会で「中央追悼施設ノイエ・ヴァッヘ」が議題として取り上げられ、各党からの代表質問と質疑応答が行われた。過去に二つの世界大戦と二つの専制政治を経験したドイツが、いったいどのような形でその犠牲者と向き合うべきか、記憶の継承のあり方が人々の大きな関心事となったわけだ。

このときもっとも大きな争点となったのが、コールが推したコルヴィッツの「死んだ息子を抱く母親」像だった。この作品はコルヴィッツが第一次世界大戦で戦死した次男ペータを念頭に置き 1937/1938 年に制作したブロンズ彫刻であるが、まずこの 38×28.5×39 センチの小さな彫刻を 4 倍に拡大する計画に対して、芸術的見地から批判

の声が上がった。大きさの変更がオリジナル作品のもつ完結性を損なう可能性が指摘され、作者の許可なく芸術作品を拡大することは許されないとする見解が示された⁸。またコルヴィッツの平和主義が東ドイツ時代に社会主義の先駆者として評価されていたことも問題視された。さらに「死んだ息子を抱く母親」像が造形的にキリスト教美術のピエタ像を連想させるため⁹、国家と宗教の区別を越えてあらゆる犠牲者を対象とするとき、追悼のシンボルとして適切かどうか争われた。大量虐殺の犠牲者を考えるならモニュメントの国際的な公募が望ましいという意見や、コルヴィッツに代わる具体的な作品提案が出されたゆえんはここにある。

4. 「コールのコルヴィッツ」—結びにかえて—

コールのコルヴィッツへのこだわりは「コールのコルヴィッツ」¹⁰と揶揄され、「連邦首相が封建君主のように自由勝手に公共の場をつくってもよいのか」¹¹と批判されたが、しかしなぜコルヴィッツだったのか。コールは「大戦を知る世代」であり、その平和主義には第二次世界大戦における兄ヴァルターの戦死が大きく影響している。それは我が子に兄と同じヴァルターという名前をつけるほどだった。またコールの祖父は第一次世界大戦で戦死している。このような個人的体験が、コールの眼差しをコルヴィッツに向けさせたのではない。第一次世界大戦で息子を亡くし、第二次世界大戦でも孫の戦死を経験したコルヴィッツが、コールにとって近しい存在になったのも不思議ではない。1993年5月14日、ノイエ・ヴァッヘ問題が取り上げられた連邦議会で、コールは次のような答弁をしている。「ケーテ・コルヴィッツは誰にでも分かるような方法で、今世紀の悲劇を表現しました。すなわち一個の人間とその運命を描くことによって。」¹²「死を嘆く母親は、悲しみ以上のものを表現していると思います。それは、われわれが20世紀の非人間的行為や計画的殺戮を前にしたとき、一人一人の尊厳に思いを致す義務があることを想起させます。」¹³

コールは当時ボンにあった首相官邸の執務室に、コルヴィッツの「夫を待つ二人の兵士の妻」¹⁴という彫刻を置いていた。戦地から戻らない夫を待つ二人の女性がうなだれ、もたれ合っている小さなブロンズ像で、「死んだ息子を抱く母親」像と同様、残された者の深い悲しみが凝縮されている作品である。コールは「今日、われわれが戦争と暴力支配の犠牲者を思い出して内省するとき、その出発点となるのは人を失った痛みと悲しみです」¹⁵とも述べている。コールの強い希望で新しい「ノイエ・ヴァッヘ」に置かれた「死んだ息子を抱く母親」像は、今、復元されたテッセノの追悼空間の中で、戦争で愛する人を失った「痛みと悲しみ」を静かに訴え続けている。新「ノイエ・ヴァッヘ」の完成後、コールはボンからベルリンへ来るとかならずこっそりとこの場所を訪れ、片隅で腰を下ろしていたと伝えられる。コールにとってコルヴィッツの作品は、平和を求める政治が忘れてはならない「人を失った痛みと悲しみ」に立ち戻るための拠り所だったのかもしれない。

【注】

- 1 建物の利用法としてカフェや銀行の支店が候補として挙げられた。
- 2 コンペには テッセノ (Heinrich Tessenow) 以外に Peter Behrens, Erich Blunck, Hans Grube, Ludwig Mies van der Rohe, Hans Poelzig が招かれた。
- 3 1933年、キリスト教的シンボルを望む各方面からの要請によって、正面の壁に樫の木でつくられた大きな十字架が掲げられた。これによって「ノイエ・ヴァッヘ」はチャペルを思わせる空間となった。ただし十字架の設置については、教会の政治的利用をもくろんだ国家社会主義政権との関わりも指摘されている。
- 4 FDJ (自由ドイツ青年団) による建物撤去の要望もあったが、その後は建物を博物館として用いることが検討された。具体的には「シンケル博物館」の設置案が浮上した。
- 5 この日の式典にはリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領も出席していた。なおコールはこの落成式の日に、当時まだ経済的見通しの立っていなかった「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人の

ための記念碑」を自分の責任において引き受けることを表明している。

- 6 Helmut Kohl: *Erklärung zur Einweihung der Zentralen Gedenkstätte in der Neuen Wache Berlin am Volkstrauertag*. In: *Bulletin des Presse- und Informationsamts der Bundesregierung Nr. 99 (16. November 1993)*
- 7 Walter Jens: *Offener Brief an den Bundeskanzler Dr. Helmut Kohl*. In: Christoph Stölzl (Hrsg.): *Neue Wache Unter den Linden*. Berlin. 1993, S.189.
- 8 生前コルヴィッツは友人のベック夫妻から頼まれて、「死んだ息子を抱く母親」像の拡大を許可している。ベック夫妻の息子は第二次世界大戦で戦死していて、その墓地 (Stuttgart-Degerloch) に、等身大に拡大された石造の「死んだ息子を抱く母親」像が設置された。Vgl. Käthe Kollwitz: *Briefe an den Sohn 1904-1945*. Berlin. 1992, S.244. これは「ノイエ・ヴァッヘ」論争において、コール案を支持する論拠となった。
- 9 作品の制作過程で、コルヴィッツ自身が日記に「ピエタのようになってきた」と書いている。Vgl. Käthe Kollwitz: *Die Tagebücher*. Berlin, 1989. S.690.
- 10 *Streit um die Neue Wache - Zur Gestaltung einer zentralen Gedenkstätte*. (Akademie der Künste) Berlin, 1993. S.57. シンポジウムにおける Rainer Höynck の発言。
- 11 Eduard Beaucamp: *Der Kleinmut der Enkel – Gegenplädoyer: Die Gegenwart muss selber reden*. In: Christoph Stölzl (Hrsg.): *Neue Wache Unter den Linden*. Berlin. 1993, S.198. 初出は 1993 年 3 月 13 日付けのフランクフルター・アルゲマイネ新聞である。
- 12 Helmut Kohl: 1993 年 5 月 14 日の連邦議会における首相答弁 In: Christoph Stölzl (Hrsg.): *Neue Wache Unter den Linden*. Berlin. 1993, S.215.
- 13 Ebd. S.215.
- 14 コールはこの彫刻を 1988 年 8 月からベルリン・ケーテ・コルヴィッツ美術館より借り受けていたが、1990 年に返却して別のエディションの同彫刻を購入している。新国立中央追悼施設建設の話が浮上したとき、最初コールはノイエ・ヴァッヘのために「夫を待つ二人の兵士の妻」像の拡大を考えていたが、その原型が拡大には適さないとするグートルン・フリッチュ (ケーテ・コルヴィッツ美術館) の意見を受け入れ、彼女と協議した結果「死んだ息子を抱く母親」像の方を拡大レプリカとする決定に至った。なおコールは政界引退後、ベルリン・ケーテ・コルヴィッツ美術館の顧問を務めている。
- 15 Helmut Kohl: 1993 年 5 月 14 日の連邦議会における首相答弁 In: Christoph Stölzl (Hrsg.): *Neue Wache Unter den Linden*. Berlin. 1993, S.215.